

研究部会 活動報告書（2024年度）

研究部会の名称

災害廃棄物研究部会

研究部会の活動目的

本研究部会が、災害廃棄物対策に関わる学会員が相互のネットワークを構築し、互いに知見を共有するとともに、見識を高め合う場として機能するよう、活動の方向性を定めると同時に、基礎となる学会員の情報プラットフォームを構築し、災害時の学術的知見を集約する仕組みを整備する。

研究部会の設置期間 年のうち、今年度は 年目

当該年度の活動実績

活動実績を冊子体などにまとめている場合は、それを提出してください。
そうでない場合は、以下に活動実績を記述してください。

- ① 年次研究発表会における企画セッション設定の有無（☒ 有 ☐ 無）←どちらかに○
（「有」の場合 ⇒ 企画セッション名とその概要と総括）【春の研究討論会ですが】

企画セミナー名： 災害廃棄物研究の動向と今後の展開

セミナーの概要と総括：

行政研究部会との共同による本企画セミナーでは、これまでの災害廃棄物の研究動向を整理し、有益な情報や求められる研究、研究成果の実務への活用方法について参加者と情報共有を行い、今後の研究の方向性や処理支援の最適な方法について議論された。参加者は約150名であった。これまでは災害廃棄物発生量推計や処理計画などの事前に備えに関する文献が多かったこと、今後の展望として実務にすぐに活かせるもの、公的な根拠資料に基づくもの、過年度の知見や教訓に基づくもの、体系化されたものが重要であることが示された。パネルディスカッションを通して、災害廃棄物の処理費用の見積もり、補助金請求等の整理の重要性について言及され、改めて発生量推計の研究とその進展の重要性が示された。行政職員の意識付けが重要であり、そのためにも発生量推計を通して廃棄物量のイメージを得ておくことが重要であること、画一的な推計ではなく、災害の種類、地域性などを勘案した推計、原単位の修正を行っていく重要性について言及された。加えて、ほかにも仮置場の適地選定手法、仮設焼却炉のレビュー、空き家・退蔵品の事前処理による廃棄物量提言などの、今後の災害廃棄物処理研究に向けた具体的な提言がなされた。

【話題提供】

1. 災害廃棄物研究部会のこれまでとこれから 鈴木慎也（福岡大学）
2. 災害廃棄物研究の動向 坂井友里江（国際航業株式会社）

パネルディスカッション 行政視点から今後求められるもの

コーディネーター 渡辺浩平（帝京大学）

パネリスト 高田光康（株式会社東和テクノのロジー）、岡山朋子（大正大学）、宇田仁（環境省関東地方環境事務所）、荒井和誠（東京都環境局）

② 研究部会独自の活動について

定例研究会やシンポジウムの開催の有無やその概要、出版活動などについて（必要に応じて、自由書式で別紙を添付してください）。

1. 災害対応の実施検討

2024年1月に発生した能登半島地震について、被害情報をMLで共有し、技術的支援に関する意見交換を実施した。部会員による現地視察等も進めている。

2. 勉強会の開催

部会員を主要構成員とする勉強会を開始した。2024年度の開催実績は下記の通りである。

・2024年8月26日

能登半島地震での富山県の対応等 佐伯孝（富山県立大学）

・2024年10月31日

熊本地震のふりかえり 鈴木慎也（福岡大学）

・2024年12月17日

災害廃棄物の発生量推計について 多島良（国立環境研究所）

・2025年2月12日

災害廃棄物処理の体系的理解について 田畑智博（神戸大学）

3. その他

定期的にウェブ会議を開催し、災害発生時における部会の支援体制・アーカイブ化等に対する議論を行った。